

宗祖大師ご誕生1250年記念

「理趣経法」ご真言ノート

長澤弘隆

## 「理趣經法」ご真言ノート

護法功勞章受章を記念して出版をした『「理趣經」ノート』(教学・教化資料版、私家版)の姉妹篇として、このたびこの「理趣經法」ご真言ノート(事相資料版)を冊子にした。

事相家でもない一介の草学道が、僭越にもこんな試みに至った理由は、若い日の加行中、道場阿闍梨の竹村教智大僧正猊下(元別格本山出流山満願寺貫主、元宗派管長・本山化主)に、文字通り師資相承の一对一伝授をしていただき、終ると時を忘れて貴重なお話を聞かせていただいたことに由来する。

最後の「不動護摩法」伝授が終った時—私は足のしびれに耐えかねモジモジしていたのだが—猊下から有難いお話があった。

—この「(四度)次第」は、私が布施(浄戒)さん(その当時、本山に在山しておられた事相大阿闍梨で、現在の能化様のご尊父)と相談して読みやすくしたもので、漢文の觀念などを書き下しにし、悉曇のご真言をひらがなにしてみました。初心の行者さんにもたいて読みやすくなったと思いますが、これからは若いあなた方の時代、大いに勉強してもらってさらに良いものにしてもらいたいものです—

そのことがずっと頭にあって10年くらい前だったか、インドに留学してサンスクリットに長じている畏友宮坂宥洪師(岡谷市照光寺)に真言の和訳のことでメールを送った際、「加行の「(四度)次第」の、ご真言の和訳があってもいいものではないか、補助資料としてどうだろう」といった趣旨のことを申し出たところ、宮坂師は同感の返信を送ってくれた上、智山伝法院の副院長に就任すると、院長の廣澤隆之師の理解と同意のもと、またのちに院長として、智山選書の『智山の真言』シリーズを宗派から公刊してくれた。相当難易度の

高い仕事だったと想像されるが、この『智山の真言』によって本宗の若い学究のサンスクリット語学や密教学が高いレベルにあることが証明された。それまでの同類の本宗資料は高名な学者の名によるものであるわりに問題点が少なくなかったが、それも払しょくされ、学山として面目躍如たる学績であり、かつて竹村猗下が「これから若いあなた方の時代」と言われたことがそこに花咲いている。

この「ノート」のサンスクリット原文も時折、『智山の真言②－金剛界念誦次第における真言の解説－』を参考にさせてもらった。私にとっては欣快・快哉この上ないことである。

折しも2年後は、宗祖弘法大師ご誕生1250年の佳年。この拙い「ノート」が別冊の『理趣経』ノート』とともに宗祖大師への報恩謝徳の標となり、また法類・法友ほか本宗の事相研究家あるいは学侶各位の「理趣経法」修法や研究の一助になれば幸いである。

末尾の「寸記」にも書いておいたが、このたびも親戚筋にあたる高橋尚夫師(大正大学名誉教授、仏教学・密教学、真言宗豊山派大王寺住職)と、長柄行光師(元早稲田大学等講師、サンスクリット研究者・悉曇阿闍梨、高野山真言宗光恩寺住職)に資料の提供やご教示をたびたびいただいた。また、親戚筋で私の事相の師である倉松隆観師(元宗派・本山法務部長、元智山講伝所阿闍梨)には、事相独特の簡略化表記の読みについてご教示をいただいた。

各師の変らぬご厚意とご教導に感謝の意を表する次第である。

令和3年6月15日

両祖の降誕に奉祝の念を献じつつ

草学道人 長澤弘隆

## 「理趣経法 金(金剛界)」次第

### 先 壇前普禮

扇を置き呂(香呂)を取り三禮 禮し了って呂を置き禮盤に登る

おん さらばたたぎゃたはんなまんなのう きゃろみ

Om sarva=tathāgata=pāda=vandanam karomi

オーン (私は)一切如来の御足に(頭をつけて)頂礼します

※「一切如来 sarva-tathāgata」:金剛界の五仏(大日如来・阿閼如来・宝生如来・阿弥陀(無量寿)如来・不空成就如来)

### 次 着座

#### 辨供

珠(念珠)を摺り (左脇机、常の位置に)念珠を置く

のうまく さまんだぼざらだん せんだまかろしゃだ そわた  
や うん たらた かん まん

Namaḥ samanta=vajrāṇām caṇḍa=mahā=roṣaṇa sphoṭaya hūṃ  
traḥ hām māṃ

あまねく金剛(部の諸尊)に帰依します。忿怒(の形相)の偉大な忿怒(尊)よ 破碎したまえ フーン トラット ハーン マーン

#### 名香

名香を取り 香呂に供ず

## 次 着座普禮

金(剛)合掌 眞言三返  
(普禮眞言(前にあり))

## 次 塗香

## 次 三密觀

蓮(華)合(掌) うん 十返

うん うん うん  
Hūṃ hūṃ hūṃ  
フーン フーン フーン

## 次 淨三業

おん そははんばしゆだ さらばたらま そははんばしゆど  
かん

Oṃ svabhāva=śuddhāḥ sarva=dharmāḥ svabhāva=śuddho 'haṃ  
オーン 一切の諸法は本来(自性)清淨であり、私も本来清淨  
です

※「一切(諸)法 sarva=dharma」を仏教学界では「あらゆる存在」  
などと和訳し「事物・事象」「モノ・コト」のように言うが、『理趣經  
ノート』で再三ふれたように、「dharma」は「事物・事象」「モノ・  
コト」ではなく、「觀想の対象の実体性とみなされる属性(かた  
ちや性質)」のことである。

## 次 三部三昧耶

### 仏部三昧耶眞言：

おん たたぎゃとどはんばや そわか

Om tathāgata=udbhavāya svāhā

オーン 如来(=仏)(部の諸尊)の出生に 成就あれ

### 蓮華部三昧耶眞言：

おん はんどぼどはんばや そわか

Om padma=udbhavāya svāhā

オーン 蓮華(部の諸尊)の出生に 成就あれ

### 金剛部三昧耶眞言：

おん ばぞろどはんばや そわか

Om vajra=udbhavāya svāhā

オーン 金剛(部の諸尊)の出生に 成就あれ

## 次 被甲護身

おん ばざらぎにはらちはたや そわか

Om vajra=agni=pradīptāya svāhā

オーン 金剛の(ように堅固な)(諸魔を焼き尽くす)火の燃える輝きに 成就あれ

## 次 加持香水

小三鈷印 キリキリ咒 二十一返加持 らんばん加持常の如し  
了って念珠を(脇机に)置く

キリキリ咒：

おん きり きり ばざら うん はった

Oṃ kili kili vajra hūṃ phaṭ

オーン 概よ、概よ、金剛の(ように堅固な)者(尊)よ フーン  
パット

らんばん加持真言:

らん Raṃ ラン ばん Vaṃ ヴァン

## 次 加持供物

通用 小三鉈印 キリキリ咒

(キリキリ咒(前にあり))

金(剛界)によらば 小五鉈印 降三世小咒 順三返 逆三返

おん そば にそば うん ばざら うん はった

Oṃ sumbha nisumbha huṃ vajra huṃ phaṭ

オーン シュンバ(暴虐の尊)よ ニシュンバ(殺戮の尊)よ  
フン 金剛(のように堅固な尊)よ フン パット

※シュンバ śumbha ニシュンバ niśumbha:ヒンドゥー神話に登場するアスラ族の兄弟王。原語は「暴虐」「殺戮」といった意味。『金剛頂経』(降三世品)によれば、仏教に従わないツヴァ神と妻のパールヴァティーを、金剛手菩薩がシュンバ・ニシュンバの姿(忿怒尊)になって踏み殺し、命を再生させた上で調伏したと言われている。

## 次 らん字観

金(剛)合(掌) 三返

おん らん そわか

Oṃ raṃ svāhā

オーン ラン(字)よ 成就あれ

## 次 観佛

金(剛)合(掌) 頂上(頭頂)に置く 三返

けん ばざらだど

Khaṃ vajra=dhātu

カン((如来が遍満する)虚空を(観ぜよ)) 金剛(のように堅固なサトリ持つ者(一切如来))の世界よ

## 次 金剛起

二拳二小鉤結(こうけつ)し 二頭を立て合せ印を仰げて(あおむけて)二頭の端(はし)を三度挙ぐる 三返

おん ばぞろ ちしゅた うん

Oṃ vāja tiṣṭha hūṃ

オーン 金剛(のように堅固なサトリ持つ者(一切如来))よ  
(金剛定から)起立されよ フーン

## 次 普禮

金(剛)合(掌) 一返

(普禮眞言(前にあり))

## 次 表白



珠(念珠) 呂(香呂)を取り 金一丁

敬って眞言教主大日如來兩部界會諸尊聖衆、殊には金剛手等諸大薩埵、惣じては佛眼所照三宝慈悲の境界毎に驚し白して言さく。

呂(香呂)を置く

夫れ以れば、此の經は薩埵胸襟の秘符覺王髻中の明珠なり。諸佛の理趣を衆生の理趣に加ら。八十俱胝の居士は八方に居して因果を顯し、十七清淨の菩薩は六塵を指して法身と示す。不思議不一ならず勝計すべからず。

之れに依って一結の門葉毎月二十一日に弘法大師の法樂に備え奉る。若し然らば、大衆諸障を遠離し萬徳を増進して二世の大願を満足し、兼ねて當院安穩にして佛法を紹隆し密場廣大にして國家豊饒ならん。乃至法界利益 普潤、敬って白す

## 次 神分

呂(香呂)を取る

抑々三密修行の處滅罪生善の砌なれば、法味飡受惠業證明の為に冥衆定んで降臨影向し給うらん。然れば外金剛部護法天等を始め奉って三界所有の天王天衆、殊に別しては、當山鎮守部類眷屬王城鎮守諸大明神、六十餘州の大小の神祇、乃至自界他方の權實二類併しながら法樂莊嚴威光倍增の為に、惣神分に、

般若心經 丁 呂を置く

大般若經名 丁

弘法大師を始め奉って三國傳燈諸阿闍梨普賢行願圓滿の  
為に、

摩訶毘盧遮那寶號 丁

金剛手菩薩名 丁

一切の靈等皆成佛道の為に、

摩訶毘盧遮那寶號 丁

金剛手菩薩名 丁

聖朝安穩天下泰平の為に、

摩訶毘盧遮那寶號 丁

金剛手菩薩名 丁

院内安穩興隆佛法の為に、

摩訶毘盧遮那寶號 丁

金剛手菩薩名 丁

護持大衆各願成就の為に、

摩訶毘盧遮那寶號 丁

金剛手菩薩名 丁

## 次 祈願

念珠を摺(す)る 晴(ハレ)の時は珠(念珠)を摺(す)らず

仰ぎうけたまわりをう、眞言教主大日如來兩部界會諸尊聖衆、  
殊には本尊界會金剛手菩薩等諸大薩埵、各々本誓を還念し  
て三密道場に降臨し、所設の供具を納受し、無二の信心を  
知見し照覽じて、二世の所願を成就圓滿せしめ玉え。

摩訶毘盧遮那寶號 丁

觀自在菩薩 丁

金剛手菩薩名 丁

兩部界會諸尊聖衆 丁

外金剛部金剛天等 丁

乃至法界平等利益の為に、

摩訶毘盧遮那寶號 丁

觀自在菩薩 丁

金剛手菩薩名 丁

## 次 五悔

金(剛)合(掌) し 珠(念珠)を左腕にかける

一切恭敬敬禮常住三寶

## 次 淨三業

唵娑縛婆縛唎馱 薩縛達磨 娑縛婆縛唎度憾

おん そははんばしゆだ さらばたらま そははんばしゆど

かん(前にあり)

## 次 普禮

唵薩縛怛他藥多 幡那滿娜曩 迦嚕弭

おん さらばたたぎゃた はんなまんなのう きゃろみ(前に

あり)

歸命十方一切佛 最勝妙法菩提衆

以身口意清淨業 懇懃合掌恭敬禮

歸命頂禮大

無始輪廻諸有中 身口意業所生罪

如佛菩薩所懺悔 我今陳懺亦如是

歸命頂禮大

我今深發歡喜心 隨喜一切福智聚  
諸佛菩薩行願中 金剛三業所生福  
緣覺聲聞及有情 所集善根盡隨喜  
歸命頂禮大

一切世燈坐道場 覺眼開敷照三有  
我今<sup>跏趺</sup>跪先勸請 轉於無上妙法輪  
所有如來三界主 臨般無餘涅槃者  
我皆勸請令久住 不捨悲願救世間  
歸命頂禮大

懺悔隨喜勸請福 願我不失菩提心  
諸佛菩薩妙衆中 常為善友不厭捨  
離於八難生無難 宿命住智莊嚴身  
遠離愚迷具悲智 悉能滿足波羅蜜  
富樂豐饒生勝族 眷屬廣多恒熾盛  
四無礙辨十自在 六通諸禪悉圓滿  
如金剛幢及普賢 願讚廻向亦如是  
歸命頂禮大悲毘盧遮那佛

## 次 發菩提心

金(剛)合(掌) 一返

唵冒地質多

おん ぼうじつた ぼたはただやみ

Oṃ bodhi-cittam utpādayāmi

オーン 私は菩提心を発起せしめています)

## 次 三昧耶戒

金(剛)合(掌) 一返

### 唵三昧耶薩怛鑠

おん さんまや さとばん

Oṃ samayas tvam

オーン (発心した)あなたは(仏と)同一(平等)です

おん さんまや さとばん

Oṃ samaya satvam

オーン (仏と)同一(平等)の薩埵(金剛薩埵)に帰依します

おん さんまや さとばん

Oṃ samaya svam

オーン (生仏の)同一(平等)よ、金剛薩埵(ストヴァム)よ

オーン 誓戒(三昧耶戒)よ、ストヴァン)

※三昧耶戒真言は、上記の三種が言われている。

## 次 勸請

珠(念珠) 呂(香呂)を取る

歸命摩訶毘盧遮那佛

四方四智四波羅蜜 十六八供四攝智 教令輪者降三世  
本尊薩埵 欲觸愛慢 兩部界會諸如來 外金剛部威徳天  
不越本誓三昧耶 降臨坦場受妙供 當山鎮守 勸請諸神  
弘法大師増法樂 三國傳燈諸阿闍梨 護持大衆

各成善願 山内安全 人法繁昌 天下法界平等利益

## 次 五大願

衆生無辺誓願度 福智無辺誓願集  
法門無辺誓願覺 如来無辺誓願事  
菩提無上誓願證

呂(香呂)を置く 念珠を左腕にかける

自他法界同利益 微音

五大願の次、下座に於て前讚(四智・心略梵語・東方讚 若くは不動讚なり) 略の時は直ちに普供養三力

## 次 普供養

金剛合掌 二頭寶形(ほうぎょう) 二大並べ立つ

おん あぼきやほじゃまにはんどまぼじれい たたぎやた  
びろきてい さんまんたはらさら うん

Oṃ amogha=pūjā=maṇi=padma=vajre tathāgata=vilokite  
samanta=prasara hūṃ

オーン 実り(利益)ある供養と宝珠と蓮華と金剛(の徳)をもつ  
者(尊)よ、如来によつて注視された者(尊)よ、あまねく拡散す  
る者(尊)よ、フーン。

## 次 三力

以我功德力 如来加持力

及以法界力 普供養而住 一丁 三力の鐘

珠(念珠)を置く 衆僧(集会の僧侶、職衆・随喜)読経

## 次 四無量觀

弥陀定印

慈無量心三摩地

おん まかまいたらや そはら

Oṃ mahā=maitrya sphara

オーン (無私の)絶対的な慈愛よ あまねく拡がれ

悲無量心三摩地

おん まかきやろだや そはら

Oṃ mahā=kāruṇya sphara

オーン (無私の)絶対的な哀れみよ あまねく拡がれ

喜無量心三摩地

おん しゅだはらぼだ そはら

Oṃ śuddha=pramoda sphara

オーン 清らかな悦びよ あまねく拡がれ

捨無量心三摩地

おん まこべいきしゃ そはら

Oṃ mahā=upekṣā sphara

オーン (無私の)絶対的な無頓着よ あまねく拡がれ

## 次 大金剛輪

二手二小二無(名)内縛して 二頭直く(まっすぐ)堅(た)て合せ  
二中を以って二頭の上節の背に屈し 相纏(まと)うて二大並べ  
堅(た)て 二頭の中の文(もん)を挂(ささ)えよ 三返

のうまく しっちりや ちびきゃなん たたぎやたなん あん  
びらじびらじ まかしゃきやら ぼじり さたさた さらてい  
さらてい たらいたらい びだまに さんばんじゃに たらま  
ちしたぎりや たらん そわか

Namaḥ tryadhvikānāṃ tathāgatānāṃ aṃ viraji viraji mahā-  
cakra=vajri sata sata sārāte sārāte trayi trayi vidhamani  
saṃbhañjani tri=matī=siddha=agrya traṃ svāhā

三世の諸如来に帰依します アン

穢れのない 離塵の者(尊)よ 大いなる法輪を転ずる金剛の  
(ように堅固なサトリ持つ)者(尊)よ(=大輪金剛の尊=大金剛  
輪の尊よ) 賢き 智奢よ 堅固で 極上の者(尊)よ 三つ(の  
眼を)持つ者(尊)よ 三つ(の眼)の者(尊)よ 吹き壊す者  
(尊)よ 粉碎する者(尊)よ 三つの智慧(=三慧)を成就した  
最上の者(尊)よ トラン 幸いあれ

## 次 地結

先ず右中指を以って左頭と中の間に入れ 右無名指を左の無名  
指と小指の間に入れて 皆頭を外に出せ

次に左中指を以って右中指の背に纏(まと)うて右頭と中の間に  
入れる

左無名指を以って右無名指の背に纏(まと)うて右無名と小指の  
間に入れて 二小二頭相挂(ささ)えて二大を下に向け捻(によう)  
す 三返

おん きりきり ぼざらぼじり ほら まんだ まんだ うん



はった

Oṃ kili kili vajra=vajri bhura bandha bandha hūṃ phat  
オーン 槩よ 槩よ 金剛(槩)なる金剛杵を持つ者(尊)よ  
(槩を地中に)打ち震わせよ (地中の諸魔を)縛りつけよ、縛り  
つけよ フーン パット

## 次 四方結

前の印に準じて二大指を<sup>木樫</sup>(ささえ)堅(た)て 牆(かきね)の  
形の如くす 三返

おん さら さら ぼざらはらきやら うん はった

Oṃ sara sara vajra-prākāra hūṃ phat  
オーン (諸魔を)追い払いたまえ 追い払いたまえ 金剛の  
(ように堅固な)牆よ フーン パット

※<sup>木樫</sup>は「諸橋」漢和辞典にもなし。「樫」(ささえる)と見た。

※「sara」:動詞√srの命令形ととった。原意は「走り去る」「疾走する」「攻めたてる」であるが、「utsr」に「追い払う」「取り除く」「振り捨てる」の意味がある。

偶々参照した、『智山の真言②』(P88)に、「[サラ](sara)は「防護する」の意の動詞(√sr(「r」は長音))の・・・」とあるが、「√sr(「r」は長音)」は「破る」「裂く」「粉碎する」「破壊する」「殺害する」という意味で「防護する」といった意味はない。意味が真逆である。


## 次 金剛眼

二手拳にして各々左右の腰側に安ず

右目に「ま」(日)とし 左に「た」(月)となす 順に一度見渡す

おん ばざらぢりしゅち また

Om vajra=dr̥ṣṭi maṭ

オーン 金剛の(ように堅固な)眼(尊)よ マト 

※「また maṭ」:怖魔辟除を象徴する真言。右目に「ま ma」=日を  
観じ、左目に「た ṭ」=月を観じ、日月があまねく道場を照らし、  
諸仏を照覽し、供具を注視し、一切の障礙を除く

## 次 召罪

二手外縛して二中立て合せ 二頭を以って三度召く

真言の末「うん」一召 「はっ」一召 「た」一召 明(真言)一返

おん さらばはんばきやりしやだびしゅだのうばざらさとば  
さんまや うん(召) はっ(召) た(召)

Om sarva=pāpa=ākaraṣaṇa=viśodhana=vajra=satva=samaya hūṃ phaṭ

オーン 一切の(自他の)罪業を召し引くことによつて浄める金剛  
の(ように堅固な)有情(薩埵=金剛薩埵)の平等(生仏不二、  
等持)よ フーン パット

## 次 摧罪

二手内縛にして二中立て合せ 独鉗杵と観ずべし

真言の終りに二中を以って三度拍つ(拍掌) 「うん」一拍 「はっ」

一拍 「た」一拍

おん ばざらはに びそほだや さらばはやまんだのうに  
はら ぼぎしゃやさらばはやぎゃちびやく さらばさとば  
さらばたたぎゃたばざらさんまや うん(拍) たら(拍)  
た(拍)

Oṃ vajra-pāṇi visphoṭaya sarva-apāya-bandhanāni  
pramokṣaya sarva-apāya-gatibyaḥ sarva-satvān sarva-tathāgata-  
vajra-samaya hūṃ traḥ

オーン 金剛手よ 一切の悪道の結縛を摧破したまえ 一切  
の悪趣から一切の有情(衆生)を解脱させたまえ 一切如来の  
金剛の(ように堅固な)平等(生仏不二、等持)よ フーン  
パット

## 次 業障除

金(剛)合(掌)し二頭を屈し甲を合せ 二大を以って二頭の側を  
押す 大慧刀(えとう)印 三返

おん ばざらきゃらま びしゅだや さらばばらたに ほださち  
えいのう さんまや うん

Oṃ vajra-karma viśodhaya sarva-āvaraṇāni buddha-satyena  
samaya hūṃ

オーン 金剛の(ように堅固な)業よ 仏の(サトリの)真実の  
力によって(衆生の)一切の蓋障を浄除したまえ 平等(生仏  
不二、等持)よ フーン

## 次 成菩提

外縛して二大二小立て合す 印を頂の左に置く 蓮華三昧耶印

おん せんだろたれい さんまんだはんだらきらに まか  
ばちりに うん

Oṃ candra=uttare samanta=bhadra=kiraṇi mahā=vajraṇi hūṃ  
オーン 最上の月(輪=菩提心)よ あまねく仁賢(普賢)の者  
よ 偉大な金剛の(ように堅固な)者(大金剛=金剛薩埵)よ  
フーン

## 次 道場觀

如来拳印

坦上に「あく」字あり、變じて寶樓閣となる。樓閣の中に殊妙の坦あり。坦の上に五の月輪あり。月輪の中に各々蓮花あり。蓮花の上に「おん ま か そ ぎゃ」の五字あり。次の如く變じて五鈷・箭・五鈷・摩竭幢・慢印となる。變じて各々金剛薩埵・欲・觸・愛・慢の五尊となる。各々相好圓滿にして威儀具足せり。中央の金剛薩埵の身は水精色の如し。右の手に五鈷金剛杵を持し、左の手に金剛鈴を持す。欲金剛身は赤色にして金剛箭を持す。計里計羅金剛身は白色にして五鈷金剛を持す。愛金剛身は青色にして摩竭幢を持す。慢金剛身は黄色にして慢印を持す。八供四攝の菩薩聖衆前後に圍繞せり。 七處加持

おん ぼく けん

Oṃ bhūḥ khaṃ

オーン (真言行者の心の)大地よ 虚空(カン)よ

## 次 大虚空藏

二手(金剛)合掌して 二中外に刃(さしちが)えて(交差して倒し)

## 二頭寶形(ほうぎょう)の如くす 三返

おん ぎゃぎゃのうさんはんばぼざら こく

Oṃ gagana=sambhava=vajra hoḥ

オーン 虚空(広大な宝蔵)から現出する金剛の(ように堅固な)もの(道場莊嚴の供具)よ ホーホ

## 次 小金剛輪

二手金(剛)拳にして 二小二頭鉤結(こうけつ)す

五處(額・右肩・左肩・心(胸)・喉)五返 印を返して四返 都合九返

おん ぼざらしゃきやら うん じゃく うん ぼん こく

Oṃ vajra=cakra hūṃ jaḥ hūṃ vaṃ hoḥ

オーン 金剛の(ように堅固な)輪壇よ フーン

ジャハ(召し) フーン(印し) ヴァン(縛し) ホーホ(喜せしむ)

## 次 送車輅

二手を仰(あおむ)け 内に相刃(さしちが)え(交差し) 二頭側(そば)め跽(ささ)えて二大二頭の下(した)の文(ぶん)を捻(ひね)す 二大外(そと)に來去(らいきよ)す 三返

おん とろ とろ うん

Oṃ turu turu hūṃ

オーン (諸尊を迎える車よ)急げ 急げ フーン

## 次 請車輅

前印 二大指を以って身に向えて招く

のうまく しっちりやちびきやなん たたぎやたなん おん  
ばざろうぎにようきやらしゃや そわか

Namas tryadhvikānām tathāgatānām om vajra=agni=ākarsāya  
svāhā

三世の諸如来に帰營します オーン 金剛の(ように堅固な)  
火(智火)を招引するために 成就あれ

## 次 召請

内縛にして右の大指を立て三度招く

おん ばざらちりきや えいけい えいき そわか

Om vajra=dhṛk ehi ehi svāhā

オーン 金剛を持する者よ おいでください おいでください  
成就あれ

※「ばざらちりきや vajra=dhṛk」: 榎尾祥雲博士『秘密事相の研究』  
P304に従う。「dhṛk」=「dhṛt」(「把持する」「有する」「になる」)  
(『梵和辞典』)。

## 次 四明

作法 常の如し

じゃく うん ばん こく

Jaḥ hūṃ vaṃ hoḥ

ジャハ(召し) フーン(印し) ヴァン(縛し) ホーホ(喜せしむ)

※この真言は四摂菩薩の種字。

「ジャハ jah」は金剛鉤、「フーン hūm」は金剛索、「ヴァン vaṃ」は金剛鑊、「ホーホ hoḥ」は金剛鈴。

## 次 拍掌

作法 常の如し

おん ばざらたら としゃ こく

Oṃ vajra-tāra tuṣya hoḥ

オーン 金剛の(ように堅固な)高く響く音よ (輪壇に招いた諸尊を)歓喜せしめよ ホーホ

## 次 結界

降三世 大印 三返

おん そば にそば うん ぎゃりかんだ ぎゃりかんだ  
うん ぎゃりかんだはや うん あのうや こく ばぎゃばん  
ばざら うん はった

Oṃ saumbha nisumbha huṃ gṛhṇa gṛhṇa huṃ gṛhṇāpāya

huṃ ānaya hoḥ bhagavan vajra huṃ phaṭ

オーン シュンバ(尊)よ ニシュンバ(尊)よ フン 捕えたまえ  
捕えたまえ フン 捕えさせたまえ フン 引き連れたまえ  
ホーホ 世尊よ 金剛の(ように堅固な)者(尊)よ フン パット

## 次 虚空網

地界の印に準じて二大指を以って二頭指の下の文を捻す 三返

おん びそほらたらぎしゃ ぼざらはんじやら うん はった  
Om̐ visphurad-rakṣa vajra-pañjara hūṃ phaṭ  
オーン 広く開いて護りたまえ 金剛の(ように堅固な)網よ  
フーン パット

## 次 火院

左の掌を以って右手の背に掩(おお)うて相着けしめよ 二大指面を合せて直(まっす)く堅て 餘の八指開き散ず 三返

おん あさんまぎに うん はった  
Om̐ asama=agni hūṃ phaṭ  
オーン (輪壇を諸魔から護る)無比なる火焰よ フーン パット

## 次 大三昧耶

二手内に相刃(さしちが)えて 二中指を堅て 頭相合す 二頭指を屈して二中指の後に着け鉤(かぎ)の如くせよ 二大指各頭指の根の下に付く

おん しょうぎゃれい まかさんまえん そわか  
Om̐ śamkale mahā=samaye svāhā  
オーン (三針を四方結した)鎖(の柵)よ 大いなる輪壇よ  
成就あれ



## 次 闕伽

作法 常の如し

のうまく さまんだぼだなん ぎゃぎゃのうさんまさんま  
そわか

Namaḥ samanta=buddhānāṃ gagana=sama=asama svāhā  
あまねく諸仏に帰依します 虚空に等しいほどに無比なるもの  
(闕伽水の浄化力)よ 成就あれ

以本清浄水 洗浴無垢身 不捨本誓故 證成我承事

## 次 華座

八葉印

おん きゃまら そわか

Oṃ kamala svāhā  
オーン (紅)蓮花(八葉の蓮花座)よ (堅固に)成就あれ

## 次 振鈴

作法は常の如し 經の「味清浄」の句の處にて振り出す

おん ばざらさとぼ あく 五鈷を取る明 鈴杵印

Oṃ vajra=satva aḥ  
オーン 金剛薩埵よ アハ

おん ばざらげんだ としゃ こく 五鈷を振る明

Oṃ vajra=ghaṇṭa tuṣya hoḥ

オーン 金剛の鈴よ (招いた諸尊を) 喜ばしたまえ (衆生の  
菩提心を驚覚させたまえ) ホーホ

## 次 段々印明(十七段各末尾の「一字眞言」)

### 金剛薩埵(初段)

二手金(剛)拳に作(な)し 右仰(あおむ)け右胸に当て 左は  
覆(ふ)せて左の腰に安ず 三返

一字眞言: うん hūṃ フーン



### 大日如来(毘盧遮那如来 第二段)

智拳印 四處加持 ロイ(口伝)如来拳印 一返

一字眞言: あーく aḥ アーハ



### 降三世(第三段)

(降三世)大印常の如し 順逆各三轉 六返

一字眞言: うん huṃ フン



### 観音(第四段)

二手金(剛)拳に作して左は仰け右の小指を伸べて左の五指  
小指より始めて次第に之を開き立つ 次左掌の中を三度搔  
(か)く 五指を開き立つる毎に各々キリク字一返搔くに三度  
八葉を開敷(かいふ)する義なり ロイ(口伝)左合掌 八返

一字眞言: きりく hrīḥ フリーヒ



### 虚空蔵(第五段)

外縛して二頭寶形(ほうぎょう) 二大並べ立てる 寶菩薩印  
一返

一字眞言：たらく trām トラーン



拳菩薩(金剛拳、第六段)

二手金(剛)拳にして左は仰(あおむ)け右は覆(ふ)せ 二拳  
重ねる 一返

一字眞言：あく aḥ アハ



文殊(第七段)

左の大頭を捻して持花の印をなす 右は刀印を作し杵に擬  
(ぎ)する勢(いきおい)を作して 三度左印を豎(タテ)に持す  
金剛界羯磨會利菩薩印 三返

一字眞言：あん am アン



轉法輪(第八段)

二手金(剛)拳面を合せ 二頭圓に(丸く)立て合せ 二大並べ  
二中の側を押す 一返

一字眞言：うん hūṃ フーン



虚空庫(第九段)

二大を以って各々二小の甲を押し 餘の六指交え刃え(交差  
し)覆せ 三度旋す 三返三轉 金剛界三昧耶會業菩薩印

一字眞言：おん om オーン



摧一切魔(第十段)

二拳向い立て二頭二小を屈して牙(が、キバ)の如くし 口の  
左右に當てる 羯磨會牙菩薩印 一返

一字眞言: かく haḥ ハハ



普賢(第十一段)

金剛合掌 一返

一字眞言: うん hūṃ フーン



外金剛部(第十二段)

内五鈷印 一返

一字眞言: ちり trī トリー



七母女天(第十三段)

右台拳(胎拳) 頭指伸べ立て鉤(こう)して三度來去す 三返

一字眞言: びゆ bhyo ビヨー



三兄弟(第十四段)

金剛合掌 一返

一字眞言: そわ svā スヴァー



四姉妹(第十五段)

金剛合掌 一返

一字眞言: かん haṃ ハン



## 五部具會(第十六段)

外五鈷印 四處加持 最秘 一返

一字眞言： ぼん うん うん うん うん

vaṃ hūṃ hūṃ hūṃ hūṃ

バン フーン フーン フーン フーン

※不空訳『理趣経』では第十六段に一字眞言を説かず。『真実経文句』に「釈に云く 心眞言を説かざる所以は、彼の教中の一一の聖衆各々一字の心眞言有り、具に載すべからず今は略して方隅を指せばなり」と。

※五部は仏部・金剛部・蓮華部・宝部・羯磨部。『真実経文句』に「四部(金・蓮・宝・羯)それぞれの中の曼荼羅に、五部の曼荼羅を具す」と。

## 五秘密印明(第十七段)

外縛して二中掌に入れ面を合せ 二大二小偃(あおむ)け  
立て合す 箭印 一返

一字眞言： うーん hūṃ フーン



已上、十七印明は秘鈔の口傳を載す 印明説文間々略して要を取り之を記す。然りと雖も師口説に依る。私略には非ず。

## 次 理供

金(剛)界 八供養(菩薩)

嬉菩薩(金剛嬉)

外縛し二大を偃(あおむ)けて立て心(胸)に當てる

おん ばざららせい こく

Om vajra=lāsye hoḥ

オーン 金剛の(ように堅固な)踊るほどの嬉しさ(金剛嬉)よ  
ホーホ

鬘菩薩(金剛鬘)

前の印 臂(ひじ)を伸べ立て額に當てて散ず

おん ばざらまれい たらた

Om vajra=māle traṭ

オーン 金剛の(ように堅固な)花や宝石の首飾り(華鬘)  
(金剛鬘)よ トラト

歌菩薩(金剛歌)

外縛して臍(へそ)より口に至り仰げ散ず

おん ばざらぎてい ぎく

Om vajra=gite giḥ

オーン 金剛の(ように堅固な)歌(金剛歌)よ ギーヒ

舞菩薩(金剛舞)

外縛を解いて舞勢を作す 三度 次金剛合掌 (頭)頂に置く

おん ばざらちりてい きりた

Om vajra=nrtye kṛt

オーン 金剛の(ように堅固な)舞い(金剛舞)よ クリト

香菩薩(金剛香)

外縛して下に向って散ず

おん ばざらどべい あく

Om vajra=dhūpe ah

オーン 金剛の(ように堅固な)香(金剛香)よ アハ

華菩薩(金剛華)

外縛して下に仰げ開き散ず

おん ばざらほしゆへい おん

Om vajra=puspe om

オーン 金剛の(ように堅固な)花(金剛華)よ オーン

燈菩薩(金剛燈)

外縛して二大針の如くす

おん ばざらろけい ちく

Om vajra=āloke diḥ

オーン 金剛の(ように堅固な)灯明(金剛燈)よ ディーヒ

塗菩薩(金剛塗)

縛を解いて胸に磨((こ)す)る

おん ばざらげんでい ぎやく

Om vajra=gandhe gaḥ

オーン 金剛の(ように堅固な)塗香(金剛塗)よ ガハ

次 普供養

二手金(剛)合(掌)し 二頭寶形(ほうぎょう)の如くし 二大指を  
豎てよ

おん さらばたたぎゃた ほんなまんなのう きゃろみ(前に  
あり)

## 次 事供

坦上右方の供具(くぐ)を一々捧献(ほうけん)す 塗(香)・華  
(鬘)・焼(香)・飲(食)・燈(明) 小三鈷(印) 「ラン」を誦じて  
加持 「オン」を誦じて供ず

## 次 讚

### 先 四智

四段作法 常の如し

おん ばざらさとば そうぎゃらか

Om vajra-satva-saṃbrahād

オーン (堅固な菩提心(サトリ)の象徴である)「金剛薩埵」  
が保持する(円明無垢な金剛智である)から(大円鏡智、阿  
閼如来の境地)

ばざらあらたんのう まどたらん

vajra-ratnam anuttaram

「金剛」のように堅固な自他「平等」のサトリの智慧である  
宝(如意宝珠)はこの上なきものである(平等性智、宝生如  
来の境地)

ばざらたらま きゃやたい

vajra-dharma-gāyanair



(大悲を以て衆生をよく観察し)「金剛」のように堅固不壊の「教法」を詠ずる(説法することによって(妙観察智、阿弥陀如来の境地)

ばざらきゃらまきやろ はんば

vajra-karma-karo bhava

(あなたは)「金剛」のように堅固な利他行を实践する者となれ(成所作智、不空成就如来の境地)

次 本尊讚

金剛合掌

東方讚:

ばざらさとば まかさとば ばざらさらばたたぎやた さん  
まんだはんたら ばざらにや ばざらはねい のうぼう  
そと てい

Vajra=satva mahā=satva vajra=sarva=tathāgata

samanta=bhadra vajra=ādya vajra=pāṇe namo 'stu te

金剛薩埵よ 偉大な有情(薩埵)よ 金剛の(ように堅固なサト)持つ一切如来(の具現者)よ あまねく賢き者(普賢)よ 金剛(のように堅固なこと)を第一とする者よ 金剛(のように堅固な)手(をもつ者)(金剛手=金剛薩埵)よ あなたに帰依します

次 普供養

二手金(剛)合(掌)し 二頭寶形(ほうぎょう)の如くし 二大指を  
豎(た)てよ  
普供養眞言(前にあり)

## 次 三力

以我功德力 如來加持力 及法界力 普供養而住

## 次 小祈願

金剛合掌

普供養 摩訶毘盧遮那佛

普供養 兩部界會 諸尊聖衆 外金剛部 護法天等  
所設供具 哀愍納受 護持弟子 滅罪生善  
無邊善願 皆令滿足 乃至法界 平等利益

## 次 禮佛

金剛合掌

南無摩訶毘盧遮那佛

南無阿閼佛 南無寶生佛 南無無量壽佛 南無不空成就佛

南無四波羅蜜菩薩 南無十六大菩薩

南無八供養菩薩 南無四攝智菩薩

南無金剛界一切諸佛菩薩摩訶薩

南無大悲胎藏界一切諸佛菩薩摩訶薩

## 次 入我我入

法界定印 是れ通用なり 若し金(剛)界に依らば彌陀定印

觀念せよ、本尊曼荼羅に坐し玉う。我れ曼荼羅に坐せり。  
我が身本尊の御身に入る。譬へば多くの明鏡の相對して、

互に影現渉入するが如し。

## 次 本尊加持

### 金剛薩埵

外縛して二中立て合せ 二大二小開き立つ 五鈷印なり

おん さんまや さとぼん(前にあり)

### 惣印言

大独鈷印と名づく 金(剛)界極喜三昧の印なり 箭印

おん まかそぎゃ ばざらさとぼ じゃく うん ぼん こく  
そらたさとぼん

Oṃ mahā-sukha vajra-satva jaḥ hūṃ vaṃ hoḥ suratas tvam  
オーン 絶対的な安樂(大樂)の者よ 金剛薩埵よ ジャハ  
(召し) フーン(印し) ヴァン(縛し) ホーホ(喜せしむ)  
あなたは(入我我入の、合一の)極喜なり

## 次 五尊各別印明

羯磨會三昧耶印各別の印明ありと雖も 今師傳に依って三  
(昧耶會の)印、羯(磨會の眞)言を用う

### 金剛薩埵

極喜三昧印

ばざらさとぼ かん

Vajra-satva haṃ  
金剛薩埵よ ハン

### 欲金剛

前の印 二頭を屈して甲を合せ 二大を並べ立て 二頭の側を押す

さらば どころぎゃ そぎゃさたま のうさ

### 計里計羅

欲金剛印 二大相交へる

さとばん ばざらさとぼ はらまく そらたく

### 愛金剛

前の印 小無名を立て 二頭を屈して二大を並べ立て二大の端二頭の端(はじ)と相合す

さらばめい まかそぎゃ ちりちうせい やたく

### 慢金剛

前の印 先ず右の股に觸れ 次に左の股に觸れる

はちゃ しつちや しゃらぐ はらのうたく

### ※上記「五秘密尊」の明(真言)について:

金剛薩埵以外の欲・触・愛・慢のご真言をサンスクリット文にしたものは、私の手許資料では見つからなかった。しかし、唯一高井観海先生の『秘密事相大系』(p901)にその漢訳があり、かつその出典は『五秘密儀軌』(『金剛頂瑜伽金剛薩埵五秘密修行念誦儀軌』(大正 20・535・b))であることがわかった(p888)ので、それを調べたところ、欲・触・愛・慢のご真言は、同種の経や儀軌にも見える「金剛歌讚」という四句の「讚」の各一句と同じであることもわかった。これを手がかりにして、高橋・長柄両師からたびたび資料提供やご教示をいただいた。

以下は、両師のご教示よる「金剛歌讚」を参考に(詳しくは、  
末尾の「寸記」を参照されたい)、私の浅学・浅慮によって  
サンスクリット文にした(還梵した)ものと、私訳である。

### 欲金剛

さらば どりぎゃ そぎゃさたま のうさ  
〈『五秘密儀軌』「金剛歌讚」一句目〉  
薩縛 努囉誑 素佉娑怛麼 曩薩  
〈『五秘密儀軌』欲金剛 明〉  
薩縛 努囉誑 素佉薩怛摩 曩娑  
〈『佛説最上根本大樂金剛不空三昧大教王經』〉  
薩哩縛 努囉伽 穌珂素怛摩 那娑

Sarva=anurāga sukha sat=mānasa(s or ḥ)

一切(の衆生)を愛著(愛護)し 安樂(大樂を得た人)で 賢者  
の心意もつ(者(金剛薩埵)よ)

### 計里計羅(触金剛)

さとばん ばざらさとぼ はらまく そらたく  
〈『五秘密儀軌』「金剛歌讚」二句目〉  
怛鑠 嚩日囉薩怛縛 鉢囉莫 素囉答  
〈『五秘密儀軌』計里計羅 明〉  
薩怛鑠 嚩日囉薩怛縛 跋囉莫 素囉多  
〈『佛説最上根本大樂金剛不空三昧大教王經』〉  
怛鑠 嚩日囉薩埵 波囉摩 穌囉多

Tvaṃ vajra=satva paramaḥ surataḥ

金剛薩埵よ、あなたは (男女合一の快樂=「入我我入」の)  
最上の極喜(妙適)なり

## 愛金剛

さらばめい まかそぎゃ ちりちうせい やたく

<『五秘密儀軌』『金剛歌讚』三句目>

婆嚩冥 摩訶素佉 涅槃住掣 野諾

<『五秘密儀軌』愛金剛 明>

薩嚩冥 摩訶素佉 涅槃住掣 野諾

<『佛說最上根本大樂金剛不空三昧大教王經』>

婆嚩彌 摩訶蘇珂 涅槃除薩囉 野ノ持チ

Bhava me mahā-sukha dṛḍha-ucchrayadaḥ

私にとって(あなたは) 大樂であり 堅固な(愛縛=衆生済度の意志の)昂ぶりを与えるものであれ

## 慢金剛

はちゃ しつちや しゃらぐ はらのうたく

<『五秘密儀軌』『金剛歌讚』四句目>

鉢囉底跛ト 悉地也 擲鉢曇多

<『五秘密儀軌』慢金剛 明>

鉢囉底跛ト 悉地也 左擲虞 鉢囉曇多

<『佛說最上根本大樂金剛不空三昧大教王經』>

鉢囉底鉢參 悉ト 左羅具 鉢囉拏多

Pratipadya siddhya ca laghu praṇataḥ

すみやかに (菩薩行を)行じ そして(衆生済度を)成就し  
(私にとって、あなたは) 屈身低頭(恭敬)する者であれ

## 次 正念誦

作法 常の如し

おん あ そわか

Om a svāhā

オーン アよ 成就あれ

## 次 本尊加持

但し 金(剛)薩(埵)並に惣印明を用う 羯磨三昧の五種略す  
下之に準ず

金剛薩埵(前にあり)

五鈷印

おん さんまや さとぼん

惣印言(前にあり)

箭印

おん まかそぎゃ ぼざらさとぼ じゃく うん ぼん こく  
そらたさとぼん

## 次 字輪觀

法界定印 入我我入が法界定印ならば彌陀定印(を用う)

觀想せよ、我が心月輪の上にア・バ・ラ・カ・キヤの五字あり。  
右に旋つて住す。而(しか)して順逆に五字を誦す。次に其の

字義を順逆に觀じ廻らす。ア字諸法本不生不可得なり。ア字諸法本不生不可得なるが故に、バ字自性離言説不可得なり。バ字自性離言説不可得なるが故に、ラ字清淨無垢染不可得なり。ラ字清淨無垢染不可得なるが故に、カ字因業不可得なり。カ字因業不可得なるが故に、キャ字等空不可得なり。是れを順觀とすキャ字等空不可得なるが故に、カ字因業不可得なり。カ字因業不可得なるが故に、ラ字清淨無垢染不可得なり。ラ字清淨無垢染不可得なるが故に、バ字自性離言説不可得なり。バ字自性離言説不可得なるが故に、ア字諸法本不生不可得なり。是れを逆觀とす  
遂に阿字本不生の理に住して言亡慮絶す。是れを無分別觀と名づく。此の觀に住し了って乃(すなわ)ち出定すべし

## 次 本尊加持

先大日 次(金剛)薩埵 惣印二種 次佛眼

大日

智拳印 四處加持 明(真言)四返

おん ばざらだど ぼん

Oṃ vajra-dhātu vaṃ

オーン 金剛の(ように堅固な) (曼荼羅の) 世界(金剛界)よ  
ヴァン

金剛薩埵(前にあり)

五鉈印 三返

おん さんまや さとぼん



惣印言(前にあり)

極喜三昧耶(印) (箭印)

おん まかそぎゃ ばざらさとぼ じゃく うん ぼん こく  
そらたさとぼん

佛眼

佛眼印明 常の如し

のうぼろ ばぎゃばと うしゅにしゃ おん ろろ そぼろ  
じんばら ちしゅた したろしゃに さらばらたさだにえい  
そわか

Namo bhagavata uṣṇīṣa om̐ ru ru sphura jvala tiṣṭha siddha-  
locane sarva=artha=sādhanīye svāhā

世尊に帰依します 頭頂(の肉髻=智慧、仏頂)よ オーン  
ル ル あまねく照らしたまえ 輝きたまえ 起ちたまえ 成就  
を得た眼(仏眼仏母)よ 一切の利事を達成した者(女尊)に  
幸いあれ

次 散念誦

佛眼(前にあり) 二十一返

のうぼろ ばぎゃばと うしゅにしゃ おん ろろ そぼろ  
じんばら ちしゅた したろしゃに さらばらたさだにえい  
そわか

金(剛界)大日(前にあり) 百返

おん ばざらだど ぼん

本尊金(剛)薩(埵)(前にあり) 千返  
おん さんまや さとぼん(前にあり)

惣呪(前にあり) 百返  
おん まかそぎゃ ばざらさとぼ じゃく うん ぼん こく  
そらたさとぼん(前にあり)

般若菩薩 百返  
おん ち しゅりしゅろだびじゃえい そわか  
Om dhi śrī=śruti=vijaye svāhā  
オーン ディ 殊勝なる聖典(般若心経)を勝ち得た者(尊)よ  
幸いあれ

降三世(前にあり) 百返  
おん そぼ にそぼ うん ばざら うん はった

讀經

大金剛輪(前にあり) 七返  
のうまく しっちりやちびきゃなん たたぎやたなん あん  
びらちびらち まかしゃきゃらばじりさたさた さらてい  
さらてい たらいたらい びだまにさんばんじゃにたらまち  
したぎりや たらん そわか

一字金輪 百返  
のうまく さまんたぼだなん ぼろん  
Namaḥ samanta-buddhānāṃ bhrūṃ  
オーン あまねく諸佛に帰依します ブルーン

## 次 後供養

若し佛布施(ぶつぷせ)等あらば閻伽(あか)の後に供ず (八供養(菩薩))

喜(金剛嬉)(前にあり)

外縛して二大を偃(あおむ)けて立て心(胸)に當てる

おん ばざららせい こく

鬘(金剛鬘)(前にあり)

前印 臂(ひじ)を伸べ立て額(ひたい)に當て散ず

おん ばざらまれい たらた

歌(金剛歌)(前にあり)

外縛して臍より口に至り仰げ散ず

おん ばざらぎてい ぎく

舞(金剛舞)(前にあり)

外縛しを解いて舞勢を作す 三返 次に金(剛合)掌し(頭)頂に置く

おん ばざらちりてい きりた

香(金剛香)(前にあり)

外縛して下に向って散ず

おん ばざらとべい あく

華(金剛華)(前にあり)  
外縛して仰げ開き散ず

おん ばざらほしゅへい おん

燈(金剛燈)(前にあり)  
外縛して二大針の如くす

おん ばざらろけい ちく

塗(金剛塗)(前にあり)  
縛を解いて胸に塗る

おん ばざらげんでい ぎやく

## 次 事供

坦上、左方の供具一々を捧献(ほうけん)す 塗(香)・(華鬘)・  
(焼香)・(飲食)・(燈明) 小三鈷印 「ラン」字加持三返  
「オン」三返を誦じて供ず

## 次 闍伽

作法 常の如し  
佛布施(ぶつぷせ)あらば闍伽(あか)の後に供ず。先ず左手を  
以って左の(脇)机の佛布施を取り、右の手に移し焼香の煙に  
薫(くん)じ、次に左手に移し右の手に小三鈷印を結び、ラン字  
三返にてこれを加持し、然して兩手虚心合掌して合掌の中に  
豎(タテ)にこれを挟み持し、普供養の明(真言)一返を誦じ之を

供し了って金剛盤の左に置く

のうまく さまだぼだなん ぎゃぎゃのうさんまさんま  
そわか

以本清浄水 洗浴無垢身 不捨本誓故 證成我承事

## 次 後鈴

作法 常の如し

後鈴真言(振鈴に同じ、前にあり)

おん ばざらさとば あく 五鈷を取る明 鈴杵印  
おん ばざらげんだ としゃ こく 五鈷を振る明

## 次 讚

先四智 次本尊 前供の如し 衆僧 四智 心略漢語 四波羅蜜

四智(前にあり)

四段作法 常の如し

おん ばざらさとば そうぎやらか  
ばざらあらたんのう まどたらん  
ばざらたらま きゃやたい  
ばざらきゃらまきゃろ はんば

東方讚(前にあり)

金剛合掌

ばざらさとぼ まかさとぼ ばざらさらばたたぎゃた さんま  
んだはんたら ばざらにや ばざらはねい のうぼう そと  
てい

## 次 普供養

二手金(剛)合(掌) 二頭寶形(ほうぎょう)の如くして並べ二大を  
豎てよ

おん あほきやほじゃまにはんどまばじれい たたぎゃた  
びろきてい さんまんだはらさら うん

## 次 三力

金剛合掌

以我功德力 如来加持力 及以法界力 普供養而住

## 次 小祈願

金剛合掌

普供養 摩訶毘盧遮那佛

普供養 兩部界會 諸尊聖衆 護法天等 所設供具

哀愍納受 護持弟子 消除不祥 增長福壽

恒受快樂 無邊善願 決定圓鬘 乃至法界

平等利益

## 次 禮佛

## 金剛合掌

南無摩訶毘盧遮那佛

南無阿閼佛 南無寶生佛 南無無量壽佛 南無不空成就佛

南無四波羅蜜菩薩 南無十六大菩薩

南無八供養菩薩 南無四攝智菩薩

南無金剛界一切諸佛菩薩摩訶薩

南無大悲胎藏界一切諸佛菩薩摩訶薩

## 次 廻向

香呂を取り 金一丁

所修功德 廻向三寶願海 廻向三界天人

廻向一切神等 廻向法界 廻向大菩提

## 次 至心廻向

呂(香呂)を置く

懺悔隨喜勸請福 願我不失菩提心

諸佛菩薩妙衆中 常為善友不厭捨

離於八難生無難 宿命住智莊嚴身

遠離愚迷具悲智 悉能滿足波羅蜜

富樂豐饒生勝族 眷屬廣多恒熾盛

四無礙辨十自在 六通諸禪悉圓滿

如金剛幢及普賢 願讚廻向亦如是

歸命頂禮大悲毘盧遮那佛

## 次 解界

大三昧耶(前にあり)

おん しょうぎゃれい まかさんまえん そわか

火院(前にあり)

おん あさんまぎに うん はった

網界(前にあり、虚空網)

おん びそほらたらきしゃ ぼざらはんじやら うん はった

降三世(前にあり)

おん そば にそんぼ うん ぼざら うん はった

四方結(前にあり)

おん さら さら ぼざらはらきやら うん はった

地結(前にあり)

おん きりきり ぼざらぼじり ほら まんだ まんだ うん  
はった

## 次 撥遣

おん ぼざらぼきしゃ ぼく

Om vajra=mokṣa muḥ

オーン 金剛の(ように堅固な)解脱(還着)よ ムフ

## 次 三部 被甲



佛部三昧耶(前にあり)

おん たたぎやとどはんばや そわか

蓮華部三昧耶(前にあり)

おん はんどぼどはんばや そわか

金剛部三昧耶(前にあり)

おん ばぞろどはんばや そわか

被甲護身(前にあり)

おん ばざらぎにはらちはたや そわか

次 普禮

金(剛)合(掌)(前にあり) 一返

おん さらばたたぎやたはんまんなのう きゃろみ

念珠を摺(すり) 即ち二匝(にそう)にして持ち、結願(けちがん)  
の金一丁 直ちに撞木(しゅもく)をかける

次 下禮盤

呂(香呂)を取り三禮 畢(おわ)って呂を置き 扇(せん)を取り  
一揖(一礼)して本座(ほんざ)に還着(げんじゃく)す

次 出堂

## <寸記>

「理趣経法」の「次第」は、倉松隆観師から法務部長任満記念にいただいたもの(総本山智積院発行「理趣経法 金」(智山講伝所阿闍梨、現在智山派管長・化主布施浄慧况下監修))を用いた。

然るに、まことに僭越ながら、「段々印明」(十七段末尾の「一字眞言」)の梵字など、ところによって補語・補釈を加えたほか、同一用語の異なる表記は一つの表記に統一した(「以って」や「右の手」など)。また、事相独特の簡略化表記にはカッコ書きで字を補った(「金合」を「金(剛)合(掌)」に、など)。さらに「𑖀」は頻度とフォントの都合で「𑖀」を用いた。

なお、「ロイ」(=口伝)などの事相独特の簡略化表記については倉松隆観師に確認させていただいた。また、いくつか難読や『諸橋漢和辞典』にもない旧字あるいは造字が、また一つ二つ読めない字があった。他日を期したいと思っている。

それから、本文の「五尊各別印明」のところで注記しておいたが、「五(秘密)尊」(『理趣経』第十七段)のうち金剛薩埵以外の四尊のご真言はそれぞれ四句からなる「金剛歌讚」の第一句～第四句と同文で、

- ①『五秘密儀軌』(『金剛頂瑜伽金剛薩埵五秘密修行念珠儀軌』大正20. 537. b中)
- ②『理趣広経』(『七巻理趣経』) (『最上根本大樂金剛不空三昧大教王經』巻七、大正8. 820. b中右)
- ③『大樂金剛薩埵修行成就儀軌』(大正20. 511. b中右)
- ④『普賢金剛薩埵略瑜伽念誦儀軌』(大正20. 535. a右)、「普賢菩薩讚」にその漢訳が、
- ⑤『金剛頂勝初瑜伽經中略出大樂金剛薩埵念誦儀軌』(大正20.

517. a左～b右)

⑥『勝初瑜伽儀軌真言』(大正20, 520, c中左)

には悉曇があり、

⑦チベット訳『理趣広経』(『吉祥最勝本初儀軌』の後半部、『吉祥なる最勝の本初の真実儀軌部分と名づけられる(経)』の第二分(『Śrī-parama-ādyā-mantra-kalpa-khaṇḍa』(真言儀軌分)(東北目録487)

にチベット訳があることを高橋師にご教示いただいた。

早速、これら資料からの還梵案と和訳案を高橋・長柄両師からいただき、それを参考に本文に示した還梵案と和訳を私の責任において試みた。原典資料から還梵案に至るまでひとえにお二人のおかげで、私の浅学・浅慮ではここまでの作業は不可能だった。

なお、原文資料によって、四句の「金剛歌讚」と四尊のご真言に若干ちがいがあり、また四尊のご真言にも少々ちがいがあある。

さらに、四句の「金剛歌讚」と四尊のご真言を見比べると、四尊のご真言には句頭と句尾に〈乱脱〉が見られる。時に、不空三蔵(『五秘密儀軌』)はその〈乱脱〉を承知しているかのようにそれに従って漢訳している。

いずれにしても、「五尊各別印明」の四尊のご真言と「金剛歌讚」(「普賢菩薩讚」)のサンスクリット原文は以下のような四句の讚だと考えられる。

Sarva-anurāga sukha sat-mānasa(s or ḥ)  
tvam vajra-satva paramaḥ surataḥ /  
Bhava me mahā-sukha dṛḍha-ucchrayadaḥ  
pratipadya siddhya ca laghu praṇataḥ //

Table 1. Risk factors for influenza A virus infection in the household of the index case, by household type and season

Risk factor	1997-8		1998-9	
	OR	95% CI	OR	95% CI
Age of index case				
<15	1.0		1.0	
15-64	1.0		1.0	
≥65	1.3	0.4-4.2	1.1	0.4-3.1
Gender of index case				
Male	1.0		1.0	
Female	1.0		1.0	
Household type				
Single	1.0		1.0	
Multi	1.0		1.0	
Household size				
1	1.0		1.0	
2	1.0		1.0	
3	1.0		1.0	
4	1.0		1.0	
5	1.0		1.0	
6	1.0		1.0	
7	1.0		1.0	
8	1.0		1.0	
9	1.0		1.0	
10	1.0		1.0	
11	1.0		1.0	
12	1.0		1.0	
13	1.0		1.0	
14	1.0		1.0	
15	1.0		1.0	
16	1.0		1.0	
17	1.0		1.0	
18	1.0		1.0	
19	1.0		1.0	
20	1.0		1.0	
21	1.0		1.0	
22	1.0		1.0	
23	1.0		1.0	
24	1.0		1.0	
25	1.0		1.0	
26	1.0		1.0	
27	1.0		1.0	
28	1.0		1.0	
29	1.0		1.0	
30	1.0		1.0	
31	1.0		1.0	
32	1.0		1.0	
33	1.0		1.0	
34	1.0		1.0	
35	1.0		1.0	
36	1.0		1.0	
37	1.0		1.0	
38	1.0		1.0	
39	1.0		1.0	
40	1.0		1.0	
41	1.0		1.0	
42	1.0		1.0	
43	1.0		1.0	
44	1.0		1.0	
45	1.0		1.0	
46	1.0		1.0	
47	1.0		1.0	
48	1.0		1.0	
49	1.0		1.0	
50	1.0		1.0	
51	1.0		1.0	
52	1.0		1.0	
53	1.0		1.0	
54	1.0		1.0	
55	1.0		1.0	
56	1.0		1.0	
57	1.0		1.0	
58	1.0		1.0	
59	1.0		1.0	
60	1.0		1.0	
61	1.0		1.0	
62	1.0		1.0	
63	1.0		1.0	
64	1.0		1.0	
65	1.0		1.0	
66	1.0		1.0	
67	1.0		1.0	
68	1.0		1.0	
69	1.0		1.0	
70	1.0		1.0	
71	1.0		1.0	
72	1.0		1.0	
73	1.0		1.0	
74	1.0		1.0	
75	1.0		1.0	
76	1.0		1.0	
77	1.0		1.0	
78	1.0		1.0	
79	1.0		1.0	
80	1.0		1.0	
81	1.0		1.0	
82	1.0		1.0	
83	1.0		1.0	
84	1.0		1.0	
85	1.0		1.0	
86	1.0		1.0	
87	1.0		1.0	
88	1.0		1.0	
89	1.0		1.0	
90	1.0		1.0	
91	1.0		1.0	
92	1.0		1.0	
93	1.0		1.0	
94	1.0		1.0	
95	1.0		1.0	
96	1.0		1.0	
97	1.0		1.0	
98	1.0		1.0	
99	1.0		1.0	
100	1.0		1.0	

OR, Odds ratio; CI, confidence interval. The index case was the first household member to become ill with influenza A virus infection. Household size was defined as the number of household members who were present in the household at the time of the index case's illness.

#### Household transmission of influenza A virus

Of 100 households in which the index case was the first household member to become ill with influenza A virus infection, 53 (53%) had one or more other household members who became ill with influenza A virus infection during the study period. The household attack rate was 18.1% (95% CI 14.7-21.6%). The attack rate was 13.3% (95% CI 10.2-16.4%) in single households and 22.2% (95% CI 18.1-26.3%) in multi-person households.

The household attack rate was 15.0% (95% CI 12.1-17.9%) in 1997-8 and 21.1% (95% CI 17.6-24.6%) in 1998-9.

The household attack rate was 13.3% (95% CI 10.2-16.4%) in single households and 22.2% (95% CI 18.1-26.3%) in multi-person households. The household attack rate was 13.3% (95% CI 10.2-16.4%) in single households and 22.2% (95% CI 18.1-26.3%) in multi-person households. The household attack rate was 13.3% (95% CI 10.2-16.4%) in single households and 22.2% (95% CI 18.1-26.3%) in multi-person households.

The household attack rate was 13.3% (95% CI 10.2-16.4%) in single households and 22.2% (95% CI 18.1-26.3%) in multi-person households. The household attack rate was 13.3% (95% CI 10.2-16.4%) in single households and 22.2% (95% CI 18.1-26.3%) in multi-person households.

The household attack rate was 13.3% (95% CI 10.2-16.4%) in single households and 22.2% (95% CI 18.1-26.3%) in multi-person households. The household attack rate was 13.3% (95% CI 10.2-16.4%) in single households and 22.2% (95% CI 18.1-26.3%) in multi-person households.

The household attack rate was 13.3% (95% CI 10.2-16.4%) in single households and 22.2% (95% CI 18.1-26.3%) in multi-person households. The household attack rate was 13.3% (95% CI 10.2-16.4%) in single households and 22.2% (95% CI 18.1-26.3%) in multi-person households.

The household attack rate was 13.3% (95% CI 10.2-16.4%) in single households and 22.2% (95% CI 18.1-26.3%) in multi-person households. The household attack rate was 13.3% (95% CI 10.2-16.4%) in single households and 22.2% (95% CI 18.1-26.3%) in multi-person households.